

# 渡嶋再考

小口雅史

Review of Watarinoshima

はじめに

- ①原「渡嶋」北海道説
- ②「渡嶋」本州北部総称」説の登場とその展開
- ③渡嶋」北海道説の反論と論争の展開
- ④渡嶋」本州北部総称説の終焉
- ⑤新北海道説の台頭
- ⑥津軽海峡を挟む世界と渡嶋  
おわりに

## 論文要旨

斉明紀に見える「渡嶋」が具体的にどの地域を指すのかという問題の解明は、古代国家における一大転機であった大化改新後の初期律令国家の形成過程や、当時の国際関係を考える上できわめて重要な問題であって、早く江戸時代から学者の注目を集めてきた。

古くは津軽の北は北海道であるという単純な理解から、渡嶋」北海道説が流布していたが、その後、津田左右吉等によって「日本書紀」のいわゆる「比羅夫北征記事」の厳密な読解が試みられるようになり、史料の解釈から渡嶋を本州北部の内におさめる見解が有力となつていき、戦後の通説的位置を永く占めてきた。

しかし近年の北海道考古学の急速な進展にともなつて本州と北海道との間の豊かな交流が明らかになるにつれて、比羅夫は当然北海道へ渡つたであろうという共通認識が形成され、津軽の北は当然北海道であるという渡嶋」北海道説が復活し、現在ではこれが通説となつたと言つてよい。

しかし中世以前における「津軽」は、現在の津軽地方の南部のみを指す語であり、半島海岸部はむしろ道南地域と密接な関わりを持つ世界であった。またそうした津軽海峡を挟む世界は、道東部あるいは道東・道北部とはやはり違った世界である。こうしたことを考えるとき、津軽の北に位置するという渡嶋はこの海峡を挟む世界に相当するのではないかと思われる。

そのさらに北には「肅慎」の世界が存在したのであるが、それこそ道東部や道東・道北部といった、本州側からはよりいっそう未知の世界であつたのではないか。「肅慎」の風俗習慣などについての多様な史料の在り方は、「肅慎」自体のもつ複合的な民族要素によつていられるものと思われる。

この津軽海峡を挟む世界は、一〇世紀頃といったん消滅し、それが渡嶋という用語の消滅の背景となるが、まもなく復活し、中世においては、津軽海峡を「内海」とする、海峡の南北一体の世界がまた形成されていっただと考えられる。